

20 世紀前半におけるエスペラントと生活世界

——竹内藤吉のライフヒストリーの素描から——

A study on a life-history of an esperantist, Takeuchi Tokichi (1885–1964)

橋 弘 文*

TACHIBANA Hirofumi

This paper concerns folks who were able to use Esperanto in early 20th century's Japan. Esperantists in local town were between folk-society and global communication. They were folks and sometimes corresponded with foreign people by Esperanto. Perusals of their life-histories contribute to study on folks who met global. This paper researches on a life-history of Takeuchi Tokichi (1885–1964). Takeuchi Tokichi was a *nushi* (an artisan of japan ware). In 1915 he began to study Esperanto.

キーワード：20 世紀前半 (early 20th century), エスペラント (Esperanto), 生活世界 (community), 竹内藤吉 (Takeuchi Tokichi), ライフヒストリー (life-history)

1 はじめに

地方に住んでいたエスペ란ティストたちは、エスペラントを通じて、いったい、どのようにして世界と出会っていたのだろうか。そして、地方に住んでいたエスペランティストたちは、かれらが暮らす地域社会とどのようにかかわっていたのだろうか。とりわけ、おたがいどしがほとんど顔見知りであるようなムラや小さなマチのエスペランティストたちは、かれらが暮らす生活世界のなかで、どのようにムラやマチの人びとと関係していたのだろうか。

ヒト、モノ、カネ、情報、技術などの移動が活発に国境を越えるグローバル化は、今日、否応なしに、人びとの生活を世界と関連づける。ベネディクト・アンダーソン氏は、万国郵便連合の設立や電信技術の普及、そして汽船や鉄道網の発展によって、人びとが世界的なコミュニケーションを実現できるようになった 19 世紀末を初期グローバリゼーションの時代と位置づけている（梅森

2007: 75～77）。

エスペラントは、まさに初期グローバリゼーションの時代のさなかの 1887 年に、ザメンホフによって創案された。エスペラントの手紙や雑誌の運搬は、1874 年の万国郵便連合の設立や鉄道などの交通網の整備によってはじめて可能になったといえる。

周知のように、エスペラントは母語を異にする人びとのあいだの架け橋になるという目的をもっていた。一方で、グローバル化はエスペラントのこの目的を後押しする。しかし、他方で、グローバル化は母語を異にする人びとのあいだにある溝を深めていったと考えられている。近代のグローバル化の両義性について、伊豫谷登士翁氏はこう指摘する（伊豫谷 2002: 38）。

人的ならびに物的な交流の飛躍的な拡大は、一方で、これまで交渉のなかった人々を結びつけるとともに、他方では、境界によって区分された集団を絶えず差異化してきたのです。

*大阪観光大学観光学部

エスペラントは、近代のこのグローバル化のコンテクストのなかで考案され、発展していった。エスペランティストもいずれかの「境界によって区分された集団」に所属していた。「境界によって区分された集団」の解消を理想とする SAT (Sennacieca Asocio Tutmonda「世界無民族性協会」) が 1921 年に結成された。しかしながら、SAT のエスペランティストといえども、日々の生活においては、「境界によって区分された集団」の人びととかかわらなければならなかっただろう。

海によって大陸とへだてられた、多言語社会ではない日本の地理的および言語的環境において、エスペラントは、日本語以外のほかのさまざまな言語と同様に、異文化の住民と交流する言語の役割をはたしてきたが、エスペラントには世界共通語という理想が内在している。それゆえ、おのおののエスペランティストが意識するしないにかかわらず、エスペランティストは世界共通語という思想性をおびることになる。注目すべきことに、エスペラントはエリートだけのあいだで使われてきたのではなく、ふつうの人びとのなかにもエスペラントに魅力を感じてエスペランティストになる人びとがあらわれた。SAT のような思想的な言動をとりたててしないエスペランティストたちも、エスペランティストであるという存在のあり方によって、エスペラントの理想を実践してきたといえる。

この稿は、エリートではないフォークのエスペランティストたちが、何を考え、どのように言明し、行動したか、という問題にせまるための準備として、20 世紀前半にエスペラントに出会った、竹内藤吉という北陸地方のエスペランティストのライフストーリーの素描をこころみる。

2 山中温泉の塗師：エスペラントに出会うまで

竹内藤吉は、明治 28 年 (1895) 年 12 月 17 日、石川県江沼郡山中村 (現在の石川県加賀市山中温泉) に生まれた。かれが生まれた 1895 年はどのような時代だったのだろうか。

1895 年の日本はまだ日清戦争の熱狂におおわれていた。朝鮮の李氏王朝末期、民衆宗教の「東学」を中心にした反政府運動が激化し、1894 年 7 月、日本は在留邦人の保護という名目で朝鮮に出兵し、朝鮮に勢力をおよぼしていた清と戦争をはじめた。1895 年 4 月、清は降伏し、下関で日清講和条約が結ばれた。1895 年 12 月 15 日、日清戦争の戦闘で死亡した人びとを対象とした招魂

祭が靖国神社で営まれた (佐谷 2009: 207)。ただし、台湾では戦争がまだつづいていた。1895 年 5 月に台湾に出兵した日本軍は、台湾中南部で激しい抵抗にあい、苦戦した。近衛師団長の北白川宮能久親王も台湾で戦死した。台湾での戦争は明治 29 年 (1896) 3 月に終わった。

多くの日本の新聞は日清戦争の報道を契機に発行部数をふやしていった (佐谷 2009: 50)。竹内藤吉が生まれたころには、江沼郡山中村にも、明治 26 年 (1893) に創立された金沢の『北國新聞』が届けられていただろう。

山中村は文字どおり山あいのなかに位置している。集落の東側に大聖寺川が深い溪谷を刻んでいる。山中村には温泉 (山中温泉) が湧出し、共同温泉浴場である総湯の近くに旅館が建ち並ぶ。伝説によれば、8 世紀に行基が薬師如来の霊夢によって山中温泉を発見し、12 世紀末に能登の地頭の長谷部信連が、鷹狩りのさい、一羽の白鷺が傷ついた脚を芦荻のあいだに洗う姿を目にしたことから、山中温泉を再発見し、温泉場を開いたという。17 世紀には松尾芭蕉が山中温泉を訪れ、「山中や菊はたおらじ湯のにほひ」の俳句を詠んでいる。

中世末に、越前から木地屋の集団が、山中温泉からさらに山深く分け入ったところにある真砂という集落に移住した。この真砂の木地屋による椀や盆などの木器の製作が、のちの山中漆器の生産にむすびついてゆく。18 世紀のなかごろ、漆を塗る技術が京都から山中温泉に伝わる。その後も輪島、金沢、越前、会津、京都などの漆塗りの技術を吸収しながら山中漆器は発展していった。

漆を塗る職人は塗師 (ぬし) とよばれる。竹内藤吉は山中温泉の塗師の子に生まれた。大正 14 年 (1925) 刊行の『石川県江沼郡誌』は、竹内藤吉の父、竹内藤三郎について、こう書いている。「竹内藤三郎。弘化元年四月生る。山中漆器の進歩改良を図りし功劳大なり。根来塗、水裂塗、布波塗等何人も未だ企てざる頃、既に率先して着手し、以て之が指導改良の範を示せり。その作品は堅牢にして世の賞揚を得たり。」(石川県江沼郡誌 1925: 427) また、『山中漆工史』によれば、竹内藤三郎は漆塗りの下地工程を改良し、そして竹内藤三郎の弟子たちが、その後の山中塗の繁栄をささえていったという (山中漆器漆工史編集委員会 1974: 55~56)。

竹内藤吉は山中小学校を卒業し、父を師匠として本格的に塗師の修業をはじめた。『山中漆工史』は、竹内藤三郎の 8 人の弟子の一人に竹内藤吉の名を記録している (山中漆器漆工史編集委員会 1974: 186)。竹内藤吉

は塗師の仕事で九州太宰府神社など遠方へ出かけることもあった(松田 1964)。塗師職人としておそらく一人前になりつつあった竹内藤吉は、二十歳のときに、エスペラントに出会った。

3 山中小学校の宿直室：エスペラントとの出会い

竹内藤吉は、大正4年(1915)の春、山中小学校の宿直室にたまたま置いてあった、雑誌『太陽』21巻第3号(1915年3月号)を手にとる。そこに掲載されていた黒板勝美の「国語の擁護を論じて国際語に及ぶ」を読み、興味をもつ。

黒板は『太陽』21巻第3号でだいたいこんなことをのべている。言語の統一が国民の団結を強固にする。各国の国語のあいだには、政治的な力関係や話者数などにより勢力のちがいがみられる。日露戦争後、世界では民族主義がさかんになり国語が自覚されるようになってきた。日本語は歴史的にも話者数においても、さらに言語の構造においてもほかの言語にけっして劣っていない。

黒板勝美は、当時、東京帝国大学の助教授で古文書学を研究していた。明治36年(1904)、黒板は29歳のときにエスペラントの学習をはじめ、1906年に日本エスペラント協会を発足させた。1908年から1910年にかけて黒板は、欧米の古文書館の視察のために、欧米出張する。その間、1908年にドイツのドレスデンで開かれた第4回エスペラント世界大会に日本エスペラント協会の代表として出席した(初芝 1998: 25~26, 38)。

言語を民族や国家との関係のなかでとらえ、世界の言語のコンテクストから日本語を論じる黒板のグローバルな視点が、竹内藤吉に新鮮に感じられたと思われる。『太陽』21巻第3号で黒板は国際語の問題については言及していない。国際語の問題は次号にもちこしとなる。竹内藤吉は黒板の論文のつづきをまちかねた(竹内 1936)。

次号の『太陽』21巻第4号(1915年4月号)で黒板は明治以降の外国語崇拜を批判する。あまりにも日本語がおろそかにされていると憤る。しかし、同時に黒板は、それでも外国語学習は必要だとのべる。なぜなら、国際間の関係が密接になったことによって、はじめて世界の各国で自国語が尊重されるようになったと指摘する。黒板は、つまり、自国語を尊重するためには、外国語学習が必要だと言う。さらに外国語学習には、世界の「智識の吸収」と「實地の交通」という現実的で重要な目的がかかわっている。

それでは日本の外国語学習の現状はどうか。黒板によれば、日本の学校教育において外国語は時間をかけて学習されているが、現状では教育効果がうすく、外国語を自在につかうようになる人がいたって少ない。また、日本の学校教育では外国語のなかから英語だけを選んで学習している。英語偏重の教育は「汎英主義を助けて」、「世界を英語国民の脚下」におくことをうながしていると黒板は批判する。

黒板は、こうした日本の外国語学習の問題を解決する方法としてエスペラントの学習を学校教育にとりいれることを提案する。エスペラントは日本人にとって英語よりも学びやすく、「中立」な国際語であると黒板はのべる。日本人はエスペラントを学習した後に、英語などのほかの外国語を学習すれば、学習効果はこれまでよりも上がるだろうと黒板は主張する。

そして黒板は、エスペラントが世界でどのような段階にあるかについて概略する。現在、欧米諸国でエスペラントの使用者は多く、エスペラントのみを使って旅行することができる。また、日本のエスペラントイストはエスペラントで世界各国の人びとと通信しており、エスペラントの書籍雑誌などの出版物もすでに豊富にある。さらに、エスペラントの世界大会が毎年開催されている。

黒板は論文の最後をこうしめくくる。

日本は之に依つて言語の困難を救ひ、一方速かに國語問題を解決して、益々日本語の發達を圖り、日本國民の發展を期さなければならぬ。而も是を措いて他に解決の途は無いのである。

竹内藤吉は黒板の論文を読んで、はじめてエスペラントについて知った。竹内藤吉は、そんなによいものなのに今まで誰からも聞かなかったことを不思議に思った。そして、エスペラントを学習したいと思った(竹内 1936)。

さっそく竹内藤吉はエスペラントの独習書と辞書を東京からとりよせてエスペラントを学びはじめる。しかし、ローマ字を知っているだけの竹内藤吉にとって、エスペラントは「やさしいどころか少しもわからなんだ。」(竹内 1936)そこで竹内藤吉は、山中小学校教員の俵池喜三郎といっしょにエスペラントを学ぶことにする。俵池は英語とドイツ語を知っており、竹内藤吉は俵池に教わりながらエスペラントの学習をはじめた(松田 1964)。

竹内藤吉は黒板勝美の論文を読んだ翌年、大正5年

(1916)の夏、金沢の乃木会館で開催されたエスペラントの講習会に二日間だけ参加した。東京帝国大学の学生の浅井恵倫がエスペラントの講師をつとめていた。

浅井恵倫は石川県能美郡小松町（現在の石川県小松市）に生まれ、金沢の第四高等学校に在学中にエスペラントに出会い、東京帝国大学に進学後も、夏休みなどに帰省して、金沢や小松を中心にしてエスペラントの普及活動をおこなっていた。浅井は大正3年（1914）3月に11人のエスペランティストとともに日本エスペラント協会金沢支部を結成した（初芝1998：34）。大正5年（1916）年、浅井は日本エスペラント協会の幹事に加わった（初芝1998：35）。浅井は大学でマライ語について研究し、大学を卒業後、台湾のヤミ語研究のパイオニアとなり、昭和11年（1936）、留学先のオランダのライデン大学でPhD.の学位を得た。浅井は、大阪外国語学校、台湾帝国大学、国立国語研究所、金沢大学、南山大学などで教育・研究にたずさわり、昭和44年（1969）に亡くなった（土田1984）。ちなみに浅井恵倫は、竹内藤吉と同じ、明治28年（1895）に生まれている。

浅井恵倫の講習をうけた後、竹内藤吉は『Orienta Azio』の文通交流欄を見て、ロシアとアメリカのエスペランティストにエスペラントで文通を試みる。これらの文通は絵はがきの交換とエスペラントの実習を目的としていたが、竹内藤吉のエスペラント力は、まだ十分なものではなかったという。

大正6年（1917）の春、竹内藤吉は故郷の山中温泉を出て、京都市内の人形工場で働きはじめる。

4 京都：山鹿泰治との出会い

1917年4月14日、エスペラントの創案者であるザメンホフがワルシャワで57年の生涯を閉じた。同年の4月23日に、ザメンホフの死は、上海着のロイター電を掲載した中国の新聞記事からの転載というかたちで『時事新報』で報道された。同様の記事が『大阪毎日新聞』にも掲載された（初芝1998：36）。さらに同年の5月2日の『大阪朝日新聞 京都附録』は「屑かご」欄で、ザメンホフの死とエスペラントをつぎのように報じた。

異人種反目の原因を除いて四海同胞主義を実現したいと云ふ希望から萬國共通の國語エスペラント語を發明したザメンホフ氏は遂に戦亂の最中に逝くなつたが

エスペラント語の勢力は著るしいものとなりつゝある▲世界の名著は大概翻譯され、各國共にエスペラント協會が出来我國に於ける會員は今や二千人に達して居る▲京都市内の會員は三條富小路西入る山鹿泰治氏只一名であるが、ザメンホフ氏の逝去を聞いて我支局を來訪し何とかして此の簡便な言語を希望者に傳へたいと話して居たから此處に一寸紹介して置く▲

京都市下京区柳馬場の洛永社という人形工場で働いていた竹内藤吉は、エスペランティストの大学生を京都市内の下宿に訪ねたとき、その学生からザメンホフの死と「屑かご」欄の記事について教えられた（竹内1936）。広島出身のその学生は広島で高橋邦太郎¹⁾にエスペラントを習っていた。

そして山鹿泰治というエスペランティストが京都に住んでいることを知った竹内藤吉は、三条にある点林堂活版所に山鹿泰治をさっそく訪ねて行った。

そのころ山鹿泰治は、兄の死のために東京から帰郷し、家業の印刷所の経営に携わっていた。

山鹿泰治は明治25年（1892）に生まれ、15歳で上京し、出版社の有楽社に住み込みで働くことになった。有楽社の支配人安孫子貞治郎はエスペランティストだった。山鹿泰治が勤めはじめて数日後、エスペラントの講習会が有楽社でひらかれた。これがきっかけとなり、山鹿泰治はエスペラントの世界に入ってしまった（向井1980：16～19）。山鹿泰治は海外の外国人とエスペラントで文通をはじめ。明治42年（1909）の夏、文通相手のひとりだったマニラ在住のポルトガル人、フレイレ（F. V. Freire）が来日し、山鹿泰治はエスペラントではじめて会話した。山鹿泰治はフレイレと出会って、フレイレの話すエスペラントをきくうちにしばらくしてフレイレの言うことを理解できるようになり、またじぶんでもエスペラントで話すことができるようになった。山鹿泰治は、「エスペラントとは何と摩訶不思議な言葉なんだろうと、その時われながらびっくりした。」（向井1980：22～23）

明治44年（1911）、山鹿泰治は、アナキストでエスペランティストの大杉栄と知り合い、みずからもアナキストとなる。明治45年（1912）に山鹿泰治は大連に行き、大連発電所に就職する。大正3年（1914）の春に大杉栄からの手紙が大連の山鹿泰治のところへ届く。大杉は、中国のアナキストの師復が上海で刊行している『民声』のエスペラントの部分を手伝ってこないかと書いていた。山鹿泰治はすぐに上海に行き、大正3年

の9月に帰国するまでの数ヶ月間、『民声』の出版にかかわった(大島・宮本1974: 32~35)。

大正6年(1917)に竹内藤吉が山鹿泰治と知り合った後、山鹿泰治はエスペラントの学習会をひらいた。竹内藤吉もその生徒のひとりになった。山鹿泰治はフランスのアナキスト、ポール・ベルテローの“La Evangelio de la Horo”(『時の福音』)を学習会の教材として使った。竹内藤吉には、この教材はむずかしすぎた(竹内1936)。大正7年(1918)、竹内藤吉は日本エスペラント協会に入会した。

大正8年(1919)年1月、竹内藤吉は大阪の中之島でひらかれた大阪エスペラント協会の会合に出席した。その会合は、大阪エスペラント協会を設立した相坂侘や高尾亮雄らが中心になってすすめられた。竹内藤吉は中之島から京都に戻った夜に発熱する。熱は翌日になっても、その次の日にも下がらない。竹内藤吉は故郷から母を呼びよせ、母に伴われていったん山中温泉に帰った。

竹内藤吉は1ヶ月ほど故郷の山中温泉で養生した後、再び、京都に帰ってきた。竹内藤吉は、エスペラントにたいする警察の対応に変化を感じとった。“La Evangelio de la Horo”を警察に取り上げられた人がいる。警察の取り締まりを恐れてエスペラントの本を売り払った人もいる(竹内1936)。そして山鹿泰治が警察に逮捕された。山鹿泰治はアナキズムのパンフレットを秘密出版しようとしたために逮捕され、出版法違反の罪により禁固3年の判決を受けた。山鹿泰治が中心となって、竹内藤吉、京大生の内野仙治、京大図書館長の島文次郎などとともに関東のエスペラント運動を活性化させる計画は、山鹿泰治の逮捕により頓挫した(山鹿1936)。

竹内藤吉が京都に住んでいたとき、かれは職場の仲間や上司にじぶんがエスペラントを学習していることを話していた。その反響として、職場の仲間の友だちがエスペラントの会合に出席することがあった。また、上司の濱田支配人からはエスペラントよりも英語を勉強することをすすめられていた(竹内1936)。竹内藤吉は開業したばかりの京都寺町のカニヤ書店²⁾を訪れ、エスペラントの本を書店にならべるように店主の中原脩司に要望し、中原脩司と議論したという(竹内1936)。

大正9年(1920)に竹内藤吉は人形工場での仕事を辞めて京都を去る。

5 長野県小県郡神川村：山本鼎との出会い

大正8年(1919)11月に、山本鼎は長野県小県郡神

川村に「日本農民美術建業の趣意書」を配布し、同年12月5日に、神川村の金井正と山越脩蔵の理解と協力を得て、農民美術練習所を神川小学校に開講した。『大正十二年四月 日本農民美術研究所概況』において、「農民美術」はつぎのように定義されている。

農民美術とは、農民の手に依て製作された装飾的手工品を指すもので、普通な手工品——例へば竹で編むだ笊とか藁で織つた蓆とかいふものと異なる點は、それぞれの作品の製作者の趣味が表れて居る事であらうと思ひます。民族的、若くは地方的の意匠、素朴な細工、作品の堅牢等を其特色とし、それぞれの趣味技巧が産業的に活用されて農家の経済を豊かにすると共に、一方自由工藝となつて、製作者及其環境を潤色した事が農民美術の歴史です。

大正11年(1922)4月2日発行の農民美術研究所の『第四年度事業計画書(自大正十一年四月至大正十二年三月)』のなかの「展覧会出品製作品数」の項で、「湯呑(セメノフ)二〇点(竹内)」という記載がある。おそらくこの「(竹内)」が竹内藤吉をさしていると思われる。竹内藤吉はおそくとも同年の4月ころからは研究所のスタッフとして作品を製作していた。大正11年9月発行の日本農民美術研究所の『産業美術ニ關スル第二回調査報告書』に大正12年(1923)1月からの研究所の組織とスタッフ名が提示されている。そのなかで、「研究部及教育部」の「塗術科」の囑託に竹内藤吉の名前が記されている。竹内藤吉は塗師職人としての技術を認められ、研究所で製作と教育にたずさわった。



写真1

農民美術練習所の名称が日本農民美術研究所に変更され、大正12年1月に神川村大屋に日本農民美術研究所

の工房が竣工する。建築家の滝沢真弓は、「農家の様式を基調として多少の洋風を加味した」（上田市山本鼎記念館 2009：44）、急勾配の屋根をもつ三階建ての工房を設計した。大正 12 年（1923）の春に、おそらくは新築の記念として工房の前で撮られた集合写真（写真 1）が、上田市山本鼎記念館に所蔵されている。研究所長の山本鼎をはじめとする研究所のスタッフや練習生たちにまじって、写真の左端に当時 28 歳の竹内藤吉の姿がみられる。

画家の倉田白羊は、東京美術学校時代からの友人である山本鼎をたすけ、日本農民美術研究所の理事と教育部主任になっていた。倉田白羊の日記の『一切録』によれば、大正 12 年（1923）5 月と 6 月ころ、竹内藤吉は杳掛に住まいをもちつつ、研究所に寝泊まりして製作をつづけていた（倉田 1923）。大正 12 年（1923）発行の研究所内の回覧雑誌『農美第 4 号』にも、「それから 竹内先生は 今 信越線 杳掛 千ヶ瀧遊園地 9 号邸」と書かれている。竹内藤吉が住んでいた千ヶ瀧遊園地は、大正 7 年（1918）に堤康次郎によって開発された別荘地だった。ちなみに山本鼎は千ヶ瀧遊園地 12 号邸に住んでいた。

話は前後するが、山本鼎は東京美術学校を卒業後、明治 39 年（1906）に有楽社発行の雑誌『東京パック』の仕事をしていた（小崎 1979：21）。山本鼎は有楽社の支配人でエスペ란ティストの安孫子貞治郎と知り合いだったろう。さらに山本鼎が、有楽社で働いていた山鹿泰治と有楽社で出会った可能性もある。

大正 5 年（1916）、山本鼎は遊学先のパリから帰国の途中でモスクワに立ち寄り、モスクワの街で児童創造展覧会を鑑賞した。このときの感動が後年の山本鼎の児童自由画教育のきっかけになったといわれている。山本鼎がモスクワに滞在していたときに、モスクワに留学していた片上伸と知り合いになった。片上伸は留学前に日本でエスペ란ティストのロシア詩人、ワシーリイ・エロシェンコに一時期ロシア語を習ったことがあった（高杉 1982：116）。

山本鼎じしんはエスペ란ティストではなかったが、かれは安孫子貞次郎や竹内藤吉のようなエスペ란ティストたちや、片上伸のようなエスペ란ティストとかかわりのある人たちの人間関係の網のなかにいたといえよう³⁾。

大正 13 年（1924）12 月発行の『農民美術』の「研究所消息」は、「塗術の竹内君は山本さんと意見の合わない處があつてよした」と竹内藤吉の辞任にふれてい

る。したがって大正 13 年（1924）12 月には竹内藤吉は日本農民美術研究所をやめていたことになる。前年の大正 12 年（1923）の 10 月に竹内藤吉の父、竹内藤三郎が亡くなったことも、竹内藤吉が日本農民美術研究所を立ち去っていった理由の一つかもしれない。

6 山代温泉：『BUDAO』と「山代志」

昭和 6 年（1931）5 月 7 日の午前 2 時ごろ、山中温泉の料理店から出火し、火災は山中町の三分の二を焼いた。『大阪朝日新聞』5 月 8 日の夕刊は、「かくて山中町の生命である温泉から九谷焼、漆器、リム工場等、悉く灰と化した、町民は惨たる光景のうちに呆然自失の態である」と大火による被害の深刻さを報じている。じっさい山中温泉が復興するまでに 10 年の歳月がかかるほど被害は甚大だった（山中町役場 1935）。

竹内藤吉が長野県小県郡神川村大屋の日本農民美術研究所を立ち去った後の数年間を、どこでどのように暮らしていたかは、今のところ、あきらかでない。もし、かれが故郷の山中温泉に帰っていたとしても、昭和 6 年の山中温泉の大火によって、かれは山中温泉を出ることになったのではなかろうか⁴⁾。そして時期については、これも今のところ確定できないが、竹内藤吉は生活の拠点を山代町に移した。

山代町は、山中温泉を流れる大聖寺川の下流に位置する。山代町も山中温泉と同様に温泉の湧出によって栄えてきた。山代温泉も行基によって発見されたと伝えられている。当地に温泉を発見した行基は温泉守護のために庵をむすび、医王善神と日光月光十二神将の像をてずから彫り、それらを祭祀し、庵を靈方山薬師寺と名づけた。後、花山法皇がこの庵を再興して薬王院と名を改めたと伝えられている。

山代温泉の源泉のすぐ近くに、公共の温泉施設である「共浴場」があった。共浴場の周囲は「湯のがわ」とよばれる。この湯のがわに旅館が建ち並んでいた。湯のがわの旅館のお風呂には源泉から直接に温泉がひかれていた。山代温泉のマチは、湯のがわの旅館を中心に形成されていた。しかしマチの部分はそれほど広くなく、山代温泉のマチをすこし歩けば田畑に出た。そこも山代温泉にふくまれていた。したがって山代温泉は、湯のがわの旅館を中心としたマチとそのまわりの農村部分から構成されていた（橘 2013）。

竹内藤吉の家は、山代温泉のマチを南方につききったところにあった。かれの家のすぐそばに岡口の堤（池）

があった。この岡口の堤の水は農業用水や防火用水として使われた。岡口の堤のまわりに、ほかの家はなく、竹内藤吉の家は岡口の堤のそばの一軒家だった。竹内藤吉の家は空間的に山代温泉のマチにも農村部にも属していなかったといえる。かれは、岡口の堤の土手でヤギを飼っていたという。

岡口の堤のそばに住まいを定めた竹内藤吉はエスペラントに積極的にかかわってゆく。

昭和7年(1932)、竹内藤吉は、東京在住のエスペラントイストの佐々城佑の助けを得て、エスペラントの教科書『エスペラント第一読本』を発行する(松田1964)。

昭和8年(1933)、竹内藤吉は、インドの P. Lakshmi Narasu が1907年に出版した“The Essence of Buddhism”の最初の章の「THE HISTRIC BUDDHA」の部分をエスペラントイストの岡本好次の日本語訳をもとにエスペラントに翻訳し、それを『BUDAO』と題する本として刊行する。

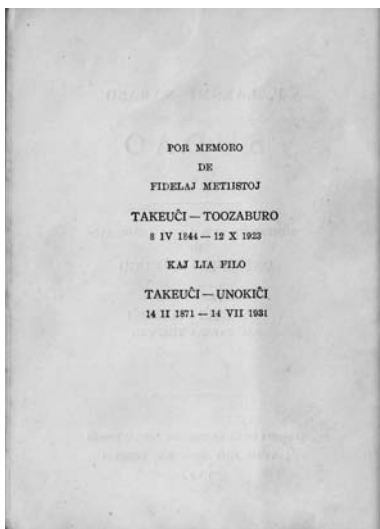


写真2

『BUDAO』の扉の次のページ(写真2)に、塗師だった亡き父、竹内藤三郎と、父の弟子だった、亡き兄、竹内卯之吉にささげる短いことばがエスペラントで「POR MEMORO DE FIDELAJ METIISTOJ」と記されている。竹内藤吉は、記憶すべき「誠実な(fidelaj)職人たち(metiistoj)」だった父と兄に『BUDAO』をささげている。

昭和9年(1934)、竹内藤吉は、日本エスペラント学会の機関誌、『La Revuo Orienta』に「Esperanto, Sanskrito kaj Palio (エス・梵・巴・語音私考)」を発表する。

竹内藤吉の「蘭亭を迎える 上」が、昭和12年(1937)3月30日の『信濃毎日新聞』朝刊の家庭欄に掲載され、翌日の同欄に「蘭亭を迎える 下」が掲載される。昭和11年(1936)11月28日、SATの創立者だったランティ(Lanti)が横浜に上陸した。ランティは警察に監視され、ランティとの交友関係も警察の監視の対象となっていたために、ランティは日本のエスペラントイストたちと自由に交流することができずに、東京のホテルで孤獨な生活をおくっていた。竹内藤吉は、ランティを新聞記事の見出しで「蘭亭」と表記し、ランティのプロフィールを紹介し、ランティがフランスから竹内藤吉の『BUDAO』を持参してきたことなど、ランティとの手紙のやりとりを示し、そして尊敬するエスペラントイストであるランティを迎えたいと書いている。昭和12年5月、竹内藤吉はランティに会うために東京に行き、山代温泉の岡口の堤のそばの一軒家にランティを連れて帰って来た。

ランティはおよそ4ヶ月間、岡口の堤のそばの竹内藤吉の家に滞在したが、ランティにとって快適な暮らしとはいえなかったし、竹内藤吉もエスペラントによるコミュニケーションをランティと十分にとることができなかった。また、竹内藤吉の家にも警官が毎日のようにやって来た。ランティは、竹内藤吉は警察の手先ではないかと疑った(野島2000:76)。しかし、山代温泉では逆に、竹内藤吉は敵国のスパイではないかとうわさされ、人びとはそれまで以上に竹内藤吉との交際を制限するようになっていた。戦後、山代温泉のあるひとが「戦時中、どうしてスパイと言われていたのか?」と竹内藤吉にむかって尋ねた。竹内藤吉は、「フランス人を泊めていたからだろう」と答えたという。

昭和12年5月12日の深夜に山代温泉で火災が起こり、120軒の家が全焼する大火災となった。ランティが滞在していた竹内藤吉の家は山代温泉のマチから離れていたために被害はなかった。5月23日の『北国新聞』の投書欄「豆タンク」に「山代大火をかへりみる」と題する竹内藤吉の文章が掲載された。「山代大火の火元が寺であつたために、僧の不身持が責められてゐる、果して我々に責める資格があらうか。」と竹内藤吉は火災の原因をめぐるマチの動向にたいして疑問をなげかける。竹内藤吉は、出火元の寺の僧にたいする非難を、山代温泉から選出されていた町議や県議の行動にてらして批判し、「名士や有力者の言葉はかしこまつてうけたまわるが、貧者や無力者の言葉はとりあげ手のないのがならわしだそれを常識としてゐる我々にも責任がある事を考へ

ねばなるまい。」と文章をむすんでいる。「竹内藤吉は敵国のスパイだ」というわさの流布は、山代温泉の名士や有力者に批判的な、こうしたかれの言動とも関係していたと推測される。

昭和15年(1940)3月1日に竹内藤吉は、武田友海の「山代志」を書写して作った和綴じの本を石川県立図書館に寄贈した。山代温泉の「湯のがわ」の一画に山代温泉神明宮宮司の武田家の屋敷があったと伝えられている。武田屋敷には温泉の湯殿があり、徳川時代、大聖寺藩の藩主が山代温泉に来たときには、武田屋敷の湯殿で温泉を楽しんだといわれている。武田友海は徳川時代末期のころの神明宮宮司であったといわれ、嘉永7年(1854)までに山代温泉の地誌「山代志」を編集した。「山代志」によれば、山代温泉の源泉は神明宮の敷地に湧出していた。

昭和31年(1956)に、山代町文化財専門委員会が「山代志」を翻刻し、『山代志』として発行した。この『山代志』の「あとがき」において、山代町文化財専門委員会委員長の永井泰蔵氏は、山代温泉の歴史を研究している人びとが「山代志」の写本の存在を知ようになったのは「数年前」、すなわち昭和25年(1950)ごろだったとのべている。『山代志』は、山代町の北市久五郎氏所蔵の「山代志」の写本を、同町の畠中鎮雄氏所蔵の写本を参考にして翻刻されている。昭和50年(1975)刊行の『加賀市史資料編第一巻』に収載されている「山代志」も同様に、北市久五郎氏所蔵本を底本とし、畠中鎮雄氏所蔵本を校合本としており、昭和15年に竹内藤吉が筆写したテキストは顧慮されていない。

おそらく竹内藤吉は北市久五郎氏所蔵本を借りて筆写したと思われる。竹内藤吉は「山代志」の重要性を理解し、多くの人びとに「山代志」が読まれることをねがって、書き写した「山代志」を和綴じにして県立図書館に寄贈したと考えられる。竹内藤吉が「山代志」を県立図書館に寄贈したとき、寄贈にかかわる何らかの文書が存在したと推測されるが、昭和23年(1948)年11月に県立図書館は火災にあい、かりにそうした文書が存在していたとしても焼失してしまった。

昭和23年(1948)に山代温泉では町長のリコールをめぐる投票がおこなわれた。投票ではリコールに「賛成」か「反対」かのどちらかの文字を記述する方式がとられた。投票終了後、竹内藤吉が山代町役場に来て、こう尋ねたという。「エスペラントで書いて投票したが、有効か無効か。」

昭和30年(1955)2月、山代町に隣接する河南村が

山中町に合併することが河南村議会で議決され、4月1日から山中町に合併した。しかし、河南村の河南・別所・荒木の三地区には、かねてから山代町への合併編入を希望する人びとが多くいた。中学生の子どもたちをもつ河南村の親たちの一部が、河南中学校へ子どもを行かせず、山代中学校に登校させようとした。山代町ではこれを認めなかったため、子どもたちは宙ぶらりんの状態になった。すると河南の親たちは子どもたちを山代温泉の光楽寺に寄留させ、そこで勉強させるという行動に出た。そして山代温泉の有志の大卒の若者たちが、光楽寺に寄留していた河南の中学生たちに勉強を教えた。竹内藤吉が光楽寺に現れて、中学生に勉強を教えていた山代温泉の人びとにこう言った。「君らは純粹でいいが、これでは(政府や軍部に欺かれていた)戦時中と同じではないか。大人が勝手に子どもを政争の材料にするのはよくない。子どもを政治に使ってはいけない。」

山代温泉では、町長選挙などの選挙がおこなわれるたびに、山代温泉を二分する意見の対立が顕在化した。温泉の権利をもつ湯のがわの旅館組合と、温泉の権利の解放を主張する人びととのあいだに激しいあらいあらいが生じた。このあらいあらいは、「ブタ(豚)とキャワズ(蛙)」というフレーズで今も伝えられている。「ブタ」は湯のがわの旅館組合側の集団をさし、「キャワズ」はそれに対抗する農家を中心とした集団をさしていた。昭和31年(1956)6月におこなわれた町長選挙の演説会で、湯のがわの旅館の経営者でもあった立候補者の演説の後、竹内藤吉じしんは「ブタ」にも「キャワズ」にも属していなかったが、その立候補者にむかって、「温泉解放を阻害しているのは、あなただ」と言い放ったという。

7 出合いとエスペラント

竹内藤吉のライフヒストリーを素描したところで、冒頭の問いにもどろう。竹内藤吉はエスペラントによってどのようにして世界とつながり、かれはエスペランティストとしてどのように生活世界とかがわっていたのだろうか。

竹内藤吉の人生は、生活の拠点となる場所に応じて、以下の四つの時期におおよそ分けることができるだろう。

第1期 山中温泉：1895年～1917年

第2期 京都：1917年～1920年

第3期 長野県小県郡神川村：1922年?～1924年

第4期 山代温泉：1931年?～1964年

第1期から第3期まで、竹内藤吉は塗師職人の技術によって生活の糧を得ていたが、第4期の山代温泉で竹内藤吉の生業が何であったかについては、今のところよくわからない。今後の課題としたい。

第1期は、竹内藤吉が塗師職人として修業を積み重ねていた時期にあたる。塗師の技術は、さまざまな地域の塗師たちの交流によって築きあげられてきた。また、塗師の仕事のために山中温泉を一時的に離れることもあった。したがって竹内藤吉は、生まれ故郷の山中温泉以外の地域についても見聞きしていた。多くの木地師や塗師が活動していた山中温泉では、日本国内に限られるとはいえず、他所についての知識と他所での体験はめずらしいことではなかったにちがいない。

第1期の後半、雑誌というマス・メディアが、エスペラントの世界に竹内藤吉を導いた。また、かれが『太陽』を手にとって読んだ場所が、山中小学校の宿直室だったという事実は興味深い。そのころ竹内藤吉は二十歳で、とうに小学校は卒業していたが、小学校に出入りしていたことになる。かれは山中小学校の教員のたすけをかりながらエスペラントを習いはじめている。おそらく、20世紀初期の日本の小学校は、子どもの教育だけでなく、地域社会との交流という重要な役割を果たしていたのだろう。だからこそ、竹内藤吉は山中小学校の宿直室で世界に通じる窓を発見できたといえよう。

第2期に竹内藤吉が人形工場の同僚にエスペラントをすすめていることは注目される。竹内藤吉はエスペラントの理想に共感し、エスペラントの仲間との交流をふかめようとし、かれじしんがエスペランティストであることをまわりの人びとに話し、おそらくエスペラントの仲間を増やそうとした。

第2期の終わりのころ、警察による取り締まりから、竹内藤吉はエスペラントが「危険な言語」でもあることに気づきはじめただろう。

第3期の竹内藤吉とエスペラントとのかかわりは、明らかではない。竹内藤吉によれば、かれが長野県に滞在していた当時、長野県のエスペラント運動は活発だった(松田1964)。のちに竹内藤吉が「蘭亭を迎へる」の文章を、おもに長野県で販売されていた『信濃毎日新聞』に掲載したことには、長野県のエスペランティストへの何らかのメッセージがこめられていたと思われる。

第4期の竹内藤吉の家の空間的な位置は、かれの社会的な位置を反映しているようにみえる。かれの家は山

代温泉のマチから離れ、そして農村集落からも離れていた。山中温泉からの移住者だった竹内藤吉は、戦時期、エスペラントの「危険な言語」の度合いが高まるにつれて、しだいに周縁的な存在へと追いやられてゆく。竹内藤吉がランティを山代温泉に連れて来て滞在させたことによって、竹内藤吉の周縁性は決定的となる。

竹内藤吉が「山代志」を筆写して、県立図書館に寄贈した事実には、わからないところが多くあるが、すくなくとも、竹内藤吉が山代温泉の歴史に深い関心をもっていったことはうかがえるだろう。

戦後、エスペラントがすでに「危険な言語」ではなくなっても、竹内藤吉は、おそらくみずからの意志によって、山代温泉の周縁にとどまりつづけた。かれは、かつての周縁性を逆手にとって、山代温泉の人びとに反撃をすることもなかった。竹内藤吉は、かれなりの方法で、山代温泉の人びとにたいして、エスペラントの存在を意識させるために発言し、行動した。

竹内藤吉の人生はいくつかの「出会い」によって彩られる。旅行と出会いは、塗師職人としての仕事をするうえで、竹内藤吉にとって、もともと必要なことだったと想像される。エスペラントとの出会いは、さらにいっそう竹内藤吉をつぎからつぎへと出会いにみちびいていった。

8 おわりに

2013年7月、私は山代温泉にお住まいの舟見武夫さんにおねがいで、山代温泉の岡口の堤があった場所を案内してもらった。かつて堤のあった場所は埋め立てられ、周囲の土地よりすこし高くなっており、一画に青年会の集会所が建てられている。岡口の堤の跡地の周囲には住宅が建ち並んでいる。岡口の堤の跡地にたずんで、竹内藤吉の家の場所をさがしていたときに、舟見さんの知り合いで、岡口の堤の近くに住んでいる方に会った。舟見さんが「竹内藤吉さんの家があった場所をさがしているところだが、どのあたりだったかな」とたずねた。その人は、「ああ、エスペラントの……」とってから、竹内藤吉の家があったあたりを指さした。

1964年に竹内藤吉が亡くなってから、およそ50年経つが、山代温泉では竹内藤吉というエスペランティストが今もまだ記憶されている。山代温泉の竹内藤吉は、いつも同じような格好をしていたという。竹内藤吉は丸い帽子をかぶり、少し短めの茶色のマントをはおり、そして柳で編んだ四角いバスケットをもって歩いて

いた。

【注】

- 1) 高橋邦太郎(1866~1941)は、帝大工科大を卒業後、土木技師として鉄道、水力発電所建設に従事した。1909年に日本エスペラント学会広島支部を設立した(柴田・後藤・峰 2013)。
- 2) カニヤ書店と中原脩司については、(野島 2000)を参照。
- 3) 山本鼎については、(山口 1995: 271~284)を参照。
- 4) 竹内藤吉の兄の竹内卯之吉が昭和6年(1931)7月14日に亡くなっている。竹内藤吉の山代温泉への移住には、山中温泉の大火災から2ヵ月後の兄の死がかかわっているかもしれない。

【参考文献】

- 石川県江沼郡役所(1925)『石川県江沼郡誌』
 石川県山中町役場編(1935)『復興の山中温泉』
 伊豫谷登士翁(2002)『グローバリゼーションとは何か 液状化する世界を読み解く』平凡社
 上田市山本鼎記念館(2009)『山本鼎 AN ESSAY ON KANAHE YAMAMOTO』
 梅森直之編(2007)『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』光文社
 大島義夫・宮本正男(1974)『反体制エスペラント運動史』三省堂
 倉田白羊(1923)『一切録』(上田市山本鼎記念館蔵)
 黒板勝美(1915)「國語の擁護を論じて國際語に及ぶ」『太陽』21巻3号~4号
 小崎軍司(1979)『夢多き先覚の画家——山本鼎評伝——』信濃路
 佐谷眞木人(2009)『日清戦争「国民」の誕生』講談社
 柴田巖・後藤齊編 峰芳隆監修(2013)『日本エスペラント運動人名事典』ひつじ書房
 高杉一郎(1982)『夜あけ前の歌——盲人詩人エロシエンコの生涯——』岩波書店
 竹内藤吉(1933)『BUDAO』
 竹内藤吉(1936)「山中から京都へ」『La Revuo Orienta』6
 橋弘文(2013)「山代温泉の昭和旅行」『かが風土記 加賀市総合民俗調査報告書』(加賀市教育委員会事務局文化課編)加賀市
 土田滋(1984)「[人と学問]浅井恵倫」『社会人類学年報』vol.10
 日本農民美術研究所(1922)『大正十一年四月 第四年度事業計画書』
 日本農民美術研究所(1922)『大正十一年九月 産業美術ニ關スル第二回調査報告書』
 日本農民美術研究所(1923)『大正十二年四月 日本農民美術研究所概況』
 日本農民美術研究所(1923)『農美』第4号
 日本農民美術研究所(1924)『農民美術』第1巻第4号

- 野島安太郎(2000)『中原脩司とその時代——エスペラント時事月刊誌“Tempo”を中心として』リーベロイ社
 初芝武美(1998)『日本エスペラント運動史』日本エスペラント学会
 牧野隆信・永井泰蔵(1975)「解題 山代志」『加賀市史資料編第一巻』加賀市
 松田久子(1964)「竹内藤吉氏の思い出」『La Torco』60号
 向井孝(1980)『アナキズムとエスペラント——山鹿泰治・人とその生涯——』JCA 出版
 山鹿泰治(1936)「数々の思ひ出」『La Revuo Orienta』6
 山口昌男(1995)『「敗者」の精神史』岩波書店
 山代町文化財専門委員会編(1956)『山代志』
 山中漆器漆工史編集委員会編(1974)『山中漆工史』山中漆器商業協同組合